

TOEFL スピーキング統合問題に向けた訓練としての ノート テイキングとリプロダクション

山本ゆうじ

明治大学サービス創新研究所/秋桜舎

<http://cosmoshouse.com/mail.htm>

概要 本稿は、ノート テイキング（メモ取り）およびリプロダクションの実践および考察に重点を置き、TOEFL iBT スピーキング統合問題に向けた訓練手法の効果を検討する。TOEFL 対策は、通訳訓練とは異なる点もあるが、ノート テイキングなどのいくつかの通訳技法や通訳訓練技法は、特に高得点者にとっては TOEFL 対策の訓練として効果的である。高得点に達しない受験者には、リテンションを改善し、確実なノート テイキングの基礎となるショート リプロダクション訓練が適切かつ効果的である。

キーワード：ノート テイキング、TOEFL、TOEIC、リプロダクション、リテンション、スピーキング テスト、リスニング テスト、学習手法、統合問題

Note-taking and verbatim reproduction as exercises for TOEFL Speaking Integrated Tasks

Yamamoto Yuji

Institute for Service Innovation Studies of Meiji University/CosmosHouse

Abstract This paper attempts to assess the effectiveness of different training methods for TOEFL iBT speaking integrated tasks with special emphasis on exercises of note-taking and verbatim reproduction techniques. Despite some notable differences between TOEFL and interpretation training, techniques such as note-taking are effective as TOEFL preparation for test-takers with high scores. For test-takers with lower scores, "short reproduction" training may be more appropriate and effective.

Keywords: note-taking, TOEFL, TOEIC, reproduction, retention, speaking test, listening test, learning method, integrated tasks

1 はじめに

本稿は、ノート テイキング（メモ取り）およびリプロダクションの実践および考察に重点を置きつつ、TOEFL iBT スピーキング統合問題のためのいくつかの訓練手法の効果を検討する。統合問題とは、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの、いわゆる 4 技能が組み合わされた設問を指す。本稿では、先行研究の中での TOEFL スピーキングにおけるノート テイキングの意義、次いで訓練の方法を述べた後に、訓練実践に基づく考察を行う。

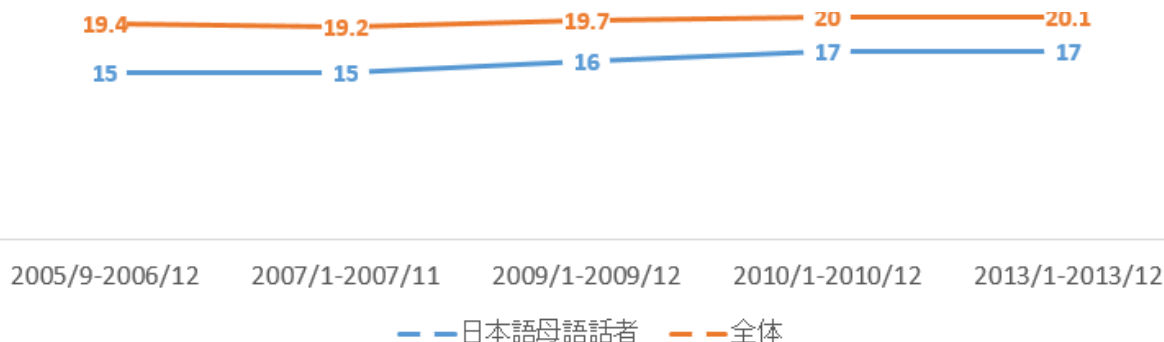
1.1. 背景：TOEFL iBT とそのスピーキング テスト

TOEFL iBT とそのスピーキング テストの特徴について概要を述べる。TOEFL iBT (TOEFL Internet-based test。以

下、別記なきときは TOEFL) は、4 技能（リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング）の各技能で 30 点満点、合計 120 点のテストである。

TOEFL iBT のスピーキング テストでは、2 問の独立問題と 4 問の統合問題からなる合計 6 問の問題があり、所要時間は合計で 20 分である（2016 年 3 月現在）。独立問題は、提示された問題文（音声でも流れる）に対してスピーキングで回答する。統合問題では、リーディング、リスニングと組み合わせたスピーキング問題が出される。特にリスニングを含む問題では、聴き取った内容に基づくスピーキングが求められる。このような統合問題は、英検、IELTS、TOEIC などにはあまり見られず、TOEFL iBT の特徴である。

グラフ 1 TOEFL iBT スピーキング スコアの推移 (日本語母語話者と全体の比較)



ただし、総合的な英語力を測れる複雑な統合問題は、技術的進歩によって初めて可能になった。旧方式のコンピューター試験が導入された時点では、TOEFL にスピーキングやライティングはなかった。2006 年に iBT としてリニューアルされた際に、コンピューターによるスピーキングやライティングの自動評価が加わった。

グラフ 1 は、TOEFL iBT スピーキング スコアの推移を示す (各年度は毎年連続していないことに注意)。日本語母語話者の受験者と、全世界での受験者の比較では、日本で iBT に移行した 2006 年には 5 ポイント近い差があった。その後 7 年を経て、3 ポイントまで差を縮めたが、依然として平均よりスピーキングのスコアは低い。表には含めていないが、スピーキング以外の技能でも総じて、2~3 ポイント、平均を下回る。日本人と韓国人が大半を占める TOEIC とは異なり、他の国の受験者も多い TOEFL iBT ではあるが、スピーキングを含め、全世界平均よりは明らかに低い。

なお、スコアの幅に対応して各技能で「レベル」が示される。スピーキングの場合は、26-30 のスコアが"Good"、18-25 が"Fair"、10-17 が"Limited"、0-9 が"Weak"となる。日本語母語話者の平均スコア 17 は、Limited の上限に位置付け

られる。

日本語母語話者の 17 という平均スコアは、世界平均との差が「わずか」3.2 ポイントであるという印象を与える。だが、このスコアは状況を正確に示しているとはいえない。グラフ 2 は、ETS によるパーセンタイル順位である。このグラフでは、スコアでは 3.2 ポイントの差でも、パーセンタイル順位では 28 の差となり、日本語母語話者が全体から見てかなり低いレベルであることが分かる。

グラフ 2 : スコアとパーセンタイル順位 (2014)

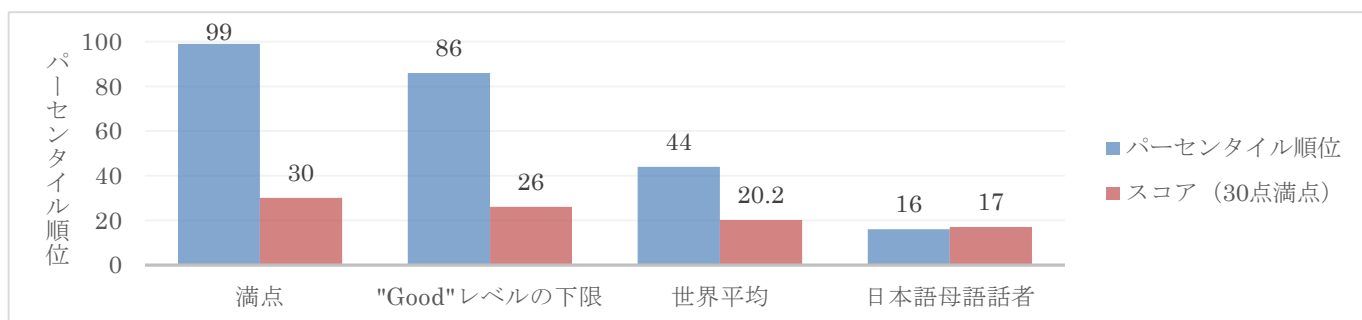


表 1 TOEFL スピーキング問題

問題 (タスク)	種別	準備時間 (秒)	回答時間 (秒)
問題 1	独立問題。	15	45
問題 2	独立問題。	15	45
問題 3	統合問題。大学キャンパスに関する問題点とその解決策。	30	60
問題 4	統合問題。特定学問分野のトピックの要約。	30	60
問題 5	統合問題。学業に関する問題と回答者による解決策。	20	60
問題 6	統合問題。特定学問分野の要約。	20	60

1.2. TOEFL スピーキング統合問題の種類と構成

本節では、リーディング、リスニング、スピーキングを組み合わせた TOEFL スピーキング統合問題の構成を確認する。

TOEFL スピーキング統合問題では、問題 1 から 6 まで、それぞれがすべて特定のパターンを持っている。表 1 に問題の種類の詳細を示す^[2]。

TOEFL スピーキング統合問題の問題 5 と 6 は、図 1 のように、リスニング、準備時間、スピーキングという手順になる。問題 3 と 4 では、短文のリーディングがリスニングの前に加わる。

TOEFL スピーキングは、人間と機械の評価を組み合わせで行われる。TOEFL スピーキングの評価基準（ルーブリック）は、公開されており^[3]、delivery、language use、topic development の 3 つの観点から評価が行われる。いずれの観点でも、発話の中断、

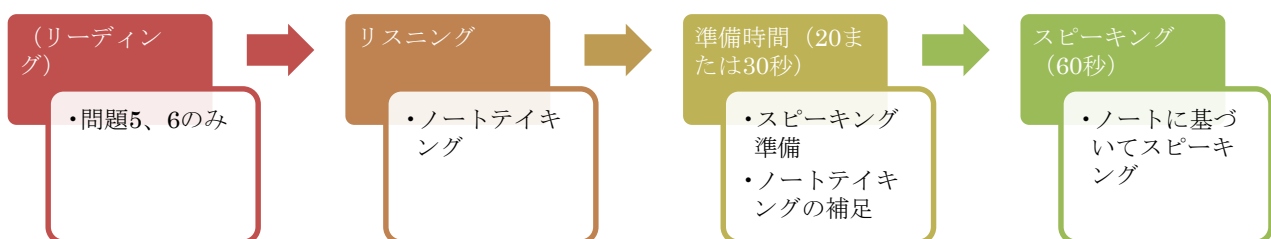
発音の問題、文法の誤りなどは、少ないほうが望ましいが、完全になくさなくても満点を取ることは可能である。結果的にそれらの誤りの程度が、聞き手の理解の妨げになるかがスコアに影響する。

葛山（2014）は、TOEFL スピーキングで 24 点以上を取得するのが困難な理由が TOEFL の採点方法に起因することを指摘している。すなわち、24 点以上を取得するには、以下が必要であるとしている。

「6 つのタスクの内 1 つ以上で最高点の 4 点を取る必要があります。（……）最高点である 4 を獲得するには、Speaking 回答の採点項目である Delivery, Language Use, Topic Development の 3 つすべてが 4 点レベルでなくてはなりません」^[4]

日本人のスピーキングで 24 点以上の割合については数値データがないが、TOEFL 教育歴 13 年の講師の言葉として一考に値する。TOEFL スピーキングスコアのマイルストーンとしては、日本平均の 17 点、

図 1 スピーキング統合問題の基本的な流れ



世界平均の 20 点、前述の 24 点、そして"Good"の 26 点が想定できる。

1.3. 本稿の手法

本稿では、主に単一事例の検討を通して、TOEFL とノート テイキングの関係について考察する。学習方法に関する検討では、特定手法の効果を的確に評価できるかという困難さがつきまとう。学習者は、必要に応じてあらゆる学習手法を試みるであろうから、他の学習手法の効果の混入を完全に除外することは困難である。さらに、集団への統計的手法が常にベストであるともいえない。TOEFL iBT の統合問題も、4 技能を個別に扱う手法の限界に対する反省から生まれたものである。⁵

2 問題意識：TOEFL でのノート テイキングの位置付け

2.1. 先行研究に見るノート テイキングの必要性

本章では、先行研究に見る TOEFL でのノート テイキングの位置付けについて考察する。リスニングとライティングでもノート テイキングは重要であるが、本稿では、特にスピーキングの統合問題でのノート テイキングについて扱う。

TOEFL、特にそのスピーキング統合問題で高スコアを得るには、ノート テイキング技能が重要である。TOEFL では、受験者のノート テイキングは 4 技能のすべてで許可されている。適切なノート テイキング技能は、TOEFL スコアを向上する上で重要な要素の一つであることが、いくつかの先行研究で示されている。たとえば、Carrell (2007) ^[6]は、ノート テイキングとテスト スコアに、ある程度の関連性 (moderately related) があることを認めている。また、Hayati と Alireza Jalilifar (2009) ^[7]は、ノート テイキング (特にコーネル メソッド) が TOEFL リスニングで一定の効果があると述べている。また Liu (2014) ^[8]の中国での調査によると、リスニングでは 87%、リーディングでは 40%の受験者が、テスト方策としてノート テイキングを行った。なお、回答選択肢として示された中では、リスニングでのノー

ト テイキングが最もよく使われる方策であり、リーディングでのノート テイキングは最も使われなかった方策であった。(この統計での「リスニング」や「リーディング」には、統合問題が含まれるかは明記されていない。) また、Liu によると、実行した受験者が少ないにもかかわらず、リーディングでのノート テイキングという方策は高スコアと関連性がある。Liu の統計は、受験者全体に対するものであり、TOEFL の上位スコア者や、スコアの伸び率が良かった受験者が取った方策を示すものではない。後述するように、ノート テイキングは複雑なマルチタスクである。「聞く」と「書く」を同時に行うのであるから、一定以上の英語レベルがないとリスニングに集中できず、逆効果となりうる。また、ノート テイキングの手法の効果は、訓練の方法と訓練時間に依存することに留意する必要がある。

ノート テイキングがどのように行われ、どの程度役に立つかは大きな個人差があると推測される。Carrell の言うように、受験者は、ノート テイキングをまったく取らないという選択肢を含め、自分にとって効率的な方法を自分で見いだす必要がある。

一方で、TOEFL リスニング テストでのノート テイキングは、成績にほとんど影響しなかったとの研究もある (Hale and Courtney (1991) ^[9])。Hale と Courtney は、会話が非常に短く、設問自体で情報記憶を要求しないことがノート テイキングの効果かなかった理由であると推定している。この調査は、CBT が 1998 年に開始される以前の 1991 年に行われ、iBT での統合問題もスピーキング問題も含まれない。2006 年以後の TOEFL iBT のリスニングでは 3~5 分間ある。ただ、この調査結果は、ノート テイキングの効果について慎重に考えるべき理由にはなりうる。

ノート テイキングは、記憶の補助手段であるものの、ノート テイキングを上手に行うかもまた記憶に依存する。一般に、非母語での作動記憶 (working memory) は、母語での作動記憶よりも保持することが困難である。非母語では、保持できる情報の量が少ない、保持できる期間が短い、外部刺激により失

われやすいなどの課題がある。これを母語のレベルまで近づけることが、非母語の習熟度を上げることにつながる。

TOEFL では、ノート テイキングをまったくせずにスピーキングを行うことも考えられるが、回答で要求される情報は具体的であり、量が非常に多い。歴史、生物学、経済学、考古学など、特定の学問分野の専門用語を含む設問が大半である。なお、TOEIC では（スピーキングおよびライティングを含め）、メモは全面的に禁止されている。これは、TOEIC では、ノート テイキングをしなくても正解できるような簡単な問題しか出題されないということでもある。

2.2. TOEFL でのノート テイキングの必要性

次に、TOEFL ではなぜノート テイキングが重要であるかを具体的な設問に基づいて見てみる。TOEFL スピーキング統合問題の一つである Question 4 は、大学での教授による講義を模した形式である。たとえば、Prep Planner に含まれる問題は以下のとおりである。短いリーディングで、心理学用語としての「フロー（flow）」という状態が説明される。リーディングのパスセージ、リスニングのスクリプト、問題文については付属資料を参照されたい。

有効なスピーキング回答では、まずリーディングを踏まえて「flow」という概念を確実に把握し、その概念を説明する。そして、それに加えて、具体例としてリスニングで示された、この教授が目撃した友人の物理学教授の以下のようなキーポイントをスピーキングで描写する必要がある。

- この物理学教授は、外見がひどいありさまなのに幸福感で満たされていた
- （数学のパズルを解くのに夢中で）夕食を抜いた
- （数学のパズルを解くのに夢中で）一睡もしていない
- この数学パズルは、物理学教授の専門とは関

係ない

「フロー」という心理学の概念に関する知識を事前に得ていることは求められておらず、回答に必要な情報はすべてリーディングおよびリスニング部分にある。前述のポイントを、スピーキングでなるべくもらさず説明するには、リスニングでのノート テイキングが役立つ。

Miller (2012) は以下のように述べている（強調は原文のまま）。

Even I (Jaime, an American with a university degree and TOEFL teacher) still need to take notes for TOEFL lectures and dialogues. I can't remember 2-3 minutes of details and information about all the different kinds of clouds or the history of dinosaurs. Taking fast, accurate notes – and then knowing how to talk from those notes – are essential skills for a higher TOEFL score.

Everyone I know who got a score of 26+ on TOEFL speaking could easily, quickly and accurately take notes.^[10]

やや主観的な表現ではあるものの、彼の言葉は、TOEFL スピーキングでのノート テイキングの重要性を端的に示している。

スピーキング統合問題では、リスニングやリーディングによるインプットの後、回答前に 15~20 秒の準備時間を経て、インプットの内容を自分の言葉で言い換える。リスニングで聞いた内容をそのまま繰り返すのではない。リスニングやリーディングの内容を要約したり、自分の観点を述べたりする作業となる。シャドウイングのように、リスニングした内容を、数秒遅れてそのまま繰り返して発話するだけであれば、内容を記憶する必要はない。言語的理解の有無にかかわらず、音声的作業記憶に基づいて発話すればよい。しかし、数秒ではなく、TOEFL のように 15~20 秒の準備時間がある場合は、音声的作業記憶を保持することは困難であり、より確実な言語的理解と、再解釈が必要になる。

TOEFL iBT でノート テイキングが効果的と考えられる理由は他にもある。その一つとして、現状の TOEFL iBT ではコンピューターの画面に書き込むことができない。紙なら簡単に行えること、たとえば問題文のポイントを下線や囲み線で強調して自分の注意を喚起し、記憶を補強するといったことができない。したがって、重要な要点を確実に意識し、（短時間であれ）確実に記憶しておきたければ、キーワードを手書きでメモするしかない。

適切なノート テイキングは、記憶強化の負担を下げる。つまりノート テイキングをすると、意識を記憶用から思考用に切り替えられる。統合問題は複雑な過程であり、長時間のテストで疲労し、さらに緊張を強いられる中では、受験者は十分に実力を発揮できない。ノート テイキングなしでは、発言のポイントの記憶強化をするために、内言を脳内で繰り返す必要がある。ノート テイキングができれば、このような記憶強化行動に時間を費やさず、インプットした内容を整理する作業に、限られた時間を割り当てられる。

さらに、突発的な記憶の喪失、いわゆる「ど忘れ」を避けるにはノート テイキングは効果的である。テスト中の、他の受験者のスピーキングの音声、テスト会場外部からの雑音など、集中力をそがれ、もともと母語より劣るリテンション（作動記憶保持）能力がさらに下がる要因は多数ある。不意に集中力がそがれると簡単なことでも思い出せなくなる。TOEFL テスト中に、数秒前まで意識内で準備していた、回答で答えるべき最重要のポイントを、雑音などの突然の阻害要因で忘れることは、ノートを取ることである程度防げる。ベテランの逐次通訳者であっても、必要に迫られない限り、発話の内容を記憶のみに頼って通訳することはなく、ノート テイキングを行うのが普通である。リテンション能力が十分であっても、自己や思い込みを防ぎ、内容保持の正

ⁱ 画面に手書きで書き込む技術は年々進歩している。作業環境を標準化して、世界各地の受験者がどのコンピューターでも同じ条件で作業できることを保証するのは現実的に困難であり、紙によるノート

確性を期するには、ノート テイキングが役立つ。

TOEFL スピーキングでのノート テイキングは、あくまでもスピーキングをより完全にするための補助手段として行われる。TOEFL で必要なのはスピーキングに役立つノートであり、「見た目がきれいで分かりやすいノート」ではない。大学の講義や企業の議事録でノート取りが得意な人が、TOEFL でも効果的なノート テイキングができるとは限らない。TOEFL で必要なのは、極めて短時間の間に得られる情報のポイントを的確に記録し、スピーキングに役立つためのノートである。TOEFL で必要なのは最大でもスピーキングで話し終える 90 秒間の記憶である。90 秒以上の長期的な記憶に残す必要はない。その短時間の記憶の補助手段としてのみ、ノート テイキングの存在意義がある。

3 訓練の実践と結果

筆者は、TOEFL スピーキング訓練として、ノート テイキングの練習を行った。手法は以下のとおりである。リスニング素材として、Discovery News <<http://news.discovery.com>>のビデオを使用した。3~4分のビデオの音声のみを聴いて、ノート テイキングを行い、その後、その内容の要約（20 秒準備時間、60 秒スピーキング）を行った。さらに、ノート テイキング練習と比較する目的で、まったくノート テイキングをせずに、記憶のみに基づいての要約練習（20 秒準備時間、60 秒スピーキング）も行った。ノートを使用しない場合は、記憶補助手段として、ビデオの内容に関わる複数のポイントに対して、左手の指との関連付けを使用した。つまり、シンプルな形で、後で発話すべきポイントのそれぞれを親指、人差し指などに対応させた。この「メンタル ノート」については後述する。スピーキングでは、ストップウォッチを使用して時間内に話すことを意識した。

筆者は、本稿で述べた訓練を行った結果、2015 年 3月に初めて受験した TOEFL iBT で Reading 29 点、

テイキングは今後ともしばらくは行われるだろう。だが、将来的には TOEFL での画面への書き込みが行えるようになるかもしれない。

Listening 27 点、Speaking 26 点、Writing 29 点、合計 111 点を取得した。ノート テイキング訓練は 4 技能すべてで役立ち、少なくとも各技能で数ポイント程度の寄与はしたものと推測される。ただ、訓練前には受験をしなかったために、訓練がどの程度成果に反映されたかを正確に知ることはできない。

4 考察

4.1. リテンションとショート リプロダクション

実践の結果、効果的なノート テイキングには、十分なリテンション技能が必要であることが確認できた。当初、筆者はノート テイキングそのものに着目していたが、実践を繰り返すことで、リテンション技能こそが基本であることを実感した。

リスニングの点数は十分なのにノート テイキングを練習してもスコアが上がらない場合、ノート テイキング技能よりも、まずはノートを取らずに記憶するリテンション技能を集中的に伸ばすことを検討したほうがよいと考えられる。リテンション技能は、リプロダクションにより効果的に訓練できる。リプロダクションとは、(英語などの) 音声を聞いた後、その音声を一時停止して、聞いたフレーズを発声する方法である。同時通訳では、長い文でもリプロダクションできる技能を求められるが、英語学習法としてのリプロダクションは、数語(5 から十数語)でよい。このような短いリプロダクションは「ショート リプロダクション」と呼べる。ショート リプロダクションは、当初は7語程度の短い区切りから始めればよい。Miller (1956) [11]のいわゆる *magical number seven* の考えに基づくと、単語を聞き取れたとしても、当初は7つ前後の単語しかうまく記憶できないはずである。だが、やがて、慣れるにしたがって、1つの単語ではなく、一連の複数の単語(たとえば"Japanese culinary art"や"in the United States")を塊(チャンク)として捉えることができるようになる。7つ前後のチャンクしか記憶できないとしても、1つのチャンクに含まれる語数を増やすことで、より長いリプロダクションが可能になる。

シャドウイング、つまり英語音声聞いてから1秒程度後で追いかけてそのまま発声する訓練方法は、通訳訓練で多用され、英語訓練法としても認知が高まっている。シャドウイングの効果としては、発声の口慣らし、リスニングしたプロソディーの再生、そして意識的リスニングによる意味理解の深化があるとみられる。だが、シャドウイングにはいくつかの限界がある。まず、シャドウイングでは、再生音声と自分の発声を同時に聞くことになる。このため、自分の発音をよく聞いてチェックすることができず、フィードバックできないため、発音の精緻さが劣る。さらに重要な問題は、発声した先から忘れてかまわないので、リテンションする必要がない。この点、リプロダクションでは、確実に作動記憶に保持する必要がある。また、シャドウイングでは少なくとも発声を捉えられれば意味が理解できなくてもそのまま繰り返すことはできる。リプロダクションでは、内容理解がなければ作動記憶での保持は困難になる。つまりリテンションを鍛えるには、シャドウイングではなくリプロダクションを行う必要がある。このリプロダクション訓練は、単独でも有用だが、ノート テイキングの基礎能力としても捉えられる。

4.2. 記憶技法と「メンタルノート」の活用

またスピーキング練習の一部として、リテンションとノート テイキング以外に、記憶技法がどの程度有用か、試みた。ここでは、紙を使わない短期の記憶技法を「メンタルノート」と呼ぶことにする。

TOEFL スピーキングには、以下のような特性がある。

- 個々のポイントを押さえることに加えて、発話内容が一貫するようにまとめることが重要
- 90秒以上は記憶を保持する必要がない

TOEFL スピーキング統合問題は、非常に短時間で行われ、時間の余裕はほとんどない。前述したように、リスニング後は、準備時間は15~30秒しかない。また、回答時にも、通訳とは異なる時間制限があり、基本的に45~60秒以内でスピーキングをまとめて完結させる必要がある。

作動記憶を長期記憶に移行するにはさまざまな記憶法があるが、最大でも 30 秒という準備時間では、使用できる記憶法は限定されてくる。ポイントを対比させる、または状況を感覚的に理解するために、視覚等の内心イメージを用いるのは有効と思われる。記憶法として、突飛な感覚的イメージとそれらを連結させて記憶を定着させる方法はよく知られている。だが、この方法は、習熟していないと時間がかかり過ぎ、発話内容をまとめるのが困難になる可能性もある。たとえば、日本人通訳であれば、英語を聞いて、視覚イメージを作った場合でも、日本語で表現することは容易であろう。また、通訳であれば、逆に英語での表現も比較的容易にできる英語力を持っているはずである。だが、TOEFL という英語のみの試験で、英語学習者が、視覚イメージを即座に英語にできるとは限らない。ノート テイキングやリプロダクションは通訳訓練技法であるものの、TOEFL と通訳の性質の違いは慎重に区別する必要がある。

結果的に、ノート テイキングなしでも、60 秒という短時間のスピーキングでは、ある程度のポイントを記憶し、発話することはできた。60 秒という短いスピーキング時間では、3~4 つのポイントが適切と考えられる。あまり情報が多すぎると、まとめることが困難になる。ノート テイキングを行わなくても、意識内で、聴きながら情報を整理し、重要なポイントを取捨選択する必要がある。この情報整理に必要な時間を考えると、複雑なイメージ記憶法にかけられる時間は少ない。

前節で述べたように、ノート テイキングを使わず、指と関連付けたメンタル ノートも試したが、この場合にはいくつか利点があった。紙のノートを読んで再構成する過程が不要になり、内言のみのリハーサルでよく、場合によってはノートを見ながらよりも自然に話せることもあった。習熟すると、この方法でもポイントの要約はかなりのレベルで可能であろう。だが、情報密度の濃い TOEFL の場合、ノート テイキングなしでは、主要ポイントはともかく、全体の情報量としては不足気味となる。ノート テイキ

ングをしたほうが、具体例、固有名詞、数値などの補足情報を含めやすい。また、ノート テイキングなしでは、前述したように突発的な記憶の喪失がありうるのは、リテンションのみの場合と同じである。通訳向けの訓練であれば、このようなメンタル ノートの訓練は必要かつ有用であり、また実践されており、ある程度は TOEFL で役立つであろう。だが、一般的な TOEFL 受験者については、主にリテンションとノート テイキング技能を鍛えたほうが情報量を充実させることができ、スコアは上げやすいと考えられる。

4.3. リスニングとノート テイキングは同時に行うマルチタスク

スピーキング統合問題では、リスニングとノート テイキングは個別に行うのではなく、同時に行うマルチタスクである。つまり、リスニングをしながらノート テイキングをする。このような、複数作業を同時に行うマルチタスクでは、それぞれの作業の精度が低下せざるを得ない。しかし、これは TOEFL のみで要求される特殊な状況ではない。試験の際のみならず、英語を実際に使う場面でも必要な、実践的な技能といえる。たとえば、企業での電話会議、大学の講義などでは、リスニングとノート テイキングを同時に行う必要がある。

TOEFL では、時間的制約が厳しいため、ノート テイキングをするのであれば、「純粋にリスニングのみに集中する」ことはできない。スピーキングでの 20 秒または 30 秒の準備時間は、ノート テイキングをする時間ではなく、リスニング中に記録したノートの確認・補足・調整と、スピーキングの準備に使うものと考えべきであろう。だが、受験者のリスニング技能のレベルによっては、マルチタスクは困難であり、異なる戦略が必要になる。ノート テイキングそのものは採点と一切関係なく、ノート テイキングの目的はあくまでも回答の品質を上げることである。ノート テイキングは記憶保持に役立つ一方で、リスニングと同時に行う複雑な並行作業であるから、注意力がそがれる危険を伴う。特に、リスニ

ング技能が不足している受験者の場合、ノート ティキングにより意識の集中がそがれやすい。ノートは取れても理解ができていないこともある。リスニング自体ができないのでは、肝心のスピーキングで答えようがない。このような場合は、マルチタスクを避け、ノート ティキングをせずにリスニングに集中したほうが点数を上げられるとも考えられる。

ただし、高スコアを目指している場合は、ノート ティキングをまったくせずに回答に必要な情報をすべて記憶するのは上級者やネイティブにとっても難しい。スピーキングで 24 点以上を得ることを目指している場合は、リスニングのみの訓練段階を経た後で、最終的にはリスニングとノート ティキングを同時に行うマルチタスクを訓練する必要があるだろう。

4.4. キー ポイントの抽出

ノート ティキングでは、リスニング部（およびリーディング部）から、「なにが問題なのか」というキー ポイントの抽出をする必要がある（**エラー! 参照元が見つかりません**。で示した、物理学教授についての問題例を参照）。この抽出がうまくできれば、リスニングとノート ティキングのマルチタスクも成功する。ノート ティキングが逆効果になるシナリオとしては、ノートに気を取られてリスニングがおろそかになること以外に、ノートを書きすぎて情報整理ができないという状況がありうる。TOEFL スピーキング統合問題では、リスニング部の内容（問題 4 ではリーディング部も含む）を可能な限り網羅してスピーキングに活かす。だが、リスニング部よりもスピーキング時間は必ず短い。したがって情報の取捨選択が必要になる。この取捨選択は、リスニングを終えた後の 15~20 秒しかない準備時間ではなく、主に「リスニングしながらノート ティキング」の中で行うことになる。リスニングとノート ティキングは同時に行うことになるが、自分のノートを見てキー ポイントに気づくのではなく、理想的には、リスニング時点でキー ポイントを押さえ、それに基づいてノート ティキングを行う必要がある。そのためには、リスニング能力、リテンション、理解力がいず

れも十分にあり、しかも関係していることが重要である。

非常に優れた受験者であれば、60 秒のスピーキング中にリスニング部の情報のかなりの部分を再現できる。だが、特に積極的な行動をしなくても、ノート ティキングの段階である程度の情報は自然に欠落する。その意味では、スピーキングはリスニング部の「要約」と考えるよりも、リスニングで得た情報の「可能な限りの再現を目指す」と捉えたほうがよい。積極的な要約と考えてしまうと、最小限の情報しか伝えることができなくなり、回答としての情報量が不足する。とはいえ、重要なキー ポイント、補助的情報を区別することは重要である。特に補足的な位置付けの情報は、60 秒の中に収まらないようであれば、除外する必要がある。

なにをメモするかについては、「キー ポイントは、適切にリスニングできていれば記憶に残っているはずだから、あえてメモする必要はない」という考え方もある。だが、情報整理中にさまざまなことを考えている中で、質問内容と回答すべきポイントが意識から抜け落ちることはよくある。考えをまとめる核として、当然のように思えても、最重要キーワードを書くことは意味があると考えられる。たとえば、yes/no を答える場合の、yes か no を書くことで、そこから思考の流れをたどり、実際にスピーキングにつなげることができる。

細かい補助的情報をどこまでメモするかも、練習しながら適切なバランスを見い出していく必要がある。TOEFL では、通訳と異なり、固有名詞や数字の正確性が絶対的に要求されるわけではない。もちろん、ノートに基づいて情報の詳細が示せば「よく理解した上で話している」ということを示せるので評価は高くなる。だが、たとえば、アカデミックなトピックに出てくる研究者の正確な名前が言えても、研究の内容自体が把握できていなければ評価は低い。

TOEFL speaking rubrics の、score 4 の Language use では以下のように述べられている。

... Though some minor (or systematic) errors

or imprecise use may be noticeable, they do not require listener effort (or obscure meaning).

このループリック項目を解釈すると、たとえば正確な数字にとられるよりも、その数字がどのような意味を持ち、どのように変化をしたかを把握するほうが優先であろう。たとえば、"the speed increased 40%"という箇所がリスニングで出て、"forty"か"fourteen"か、聞き取りに自信がなければ、"increased"という点のほうをしっかりと言えればよいと考えられる。ただし、このような情報の欠落が全体的に多いと、スコアが低くなると予想される。

4.5. 省略と図解化

ノート テイキングでは、限られた時間で情報を記録するためにさまざまな形の省略を多用する。ここでは、通訳技法をそのまま転用できる。たとえば、頭字語として、United States を US と書くなどは一般的なメモでもよく行われるが、やや特殊な書き方としては、母音を省略し、子音のみを残す方法も使われる。さらに、簡単な図解化として、記号、矢印、線などを使用できる。また、頻出するが長い単語は覚えやすい記号で代用できることがある。たとえば therefore を ∴ と書くなどである。

この他、矢印、線により、変化や関連性を表せる。また線や囲みを使って、キー ポイントを示せる。たとえば、ノート全体を見渡したときに、話すべき複数のキー ポイントを囲んで、一目で理解できるようにしておく。トピックの切れ目を示すための区切りの線も使われる。また、「話した内容は線を引いて消す」という通訳の手法も、ポイントを順番にもらさず話すために有効と思われる。その他の留意点としては、「書いた文字、略記、記号が読めない」ことを防ぐために、読めるようにかつ手際よくメモを取る練習が必要である。

省略と図解化では、どの手法が適しているかには個人差があり、絶対的な法則はないので、さまざまな手法を試みるのが望ましい。だが、省略と図解化は、中途半端に使うと混乱を招くため、繰り返し訓練をして習熟する必要がある。

4.6. スピーキングでの情報再構成

スピーキングでは、上記の手法を駆使して書いたノートを手がかりにしつつ、記録した情報を「再構成」しながら話す必要がある。ここでの再構成とは、元情報の機械的なコピーを繰り返すことではない。自分の言葉でリフレーズする必要があり、そのためには、類義語と類似表現の知識が必要となる。

Carrell (2007) は、TOEFL でのノート テイキング時点でのパラフレーズを行うことの難しさを指摘している。つまり聞いた言葉をそのままメモするのではなく、メモの時点で自分の言葉に書き換えるのは難しいということである。この指摘には同意するが、ノート テイキング後のスピーキングをする際には、メモしたキーワードを読み上げるだけでなく、ある程度のパラフレーズは必要になる。

再構成には、客観的再構成、主観的再構成の2種がある。客観的再構成は、話し手の情報を正確かつ客観的に聞き取った上で、再構成する。主観的再構成は、自らの観点に沿った再構成である。TOEFL スピーキング 6問のうち、主観的再構成、つまり受験者自身の観点が求められるのは問題 5のみであるし、独自性が格別求められるわけではない。それ以外の問題では、むしろ正確性と客観性が重要であることに留意したい。

スピーキングでは、ノートの略記、図解などのノートを見ながら完全なセンテンスを組み立てていく。理解を妨げない程度の文法の誤りは許容されているとはいえ、(ノートでは省略されがちな)冠詞や可算名詞の数など基本的な文法 (ループリックでの language use) にも十分注意を払う必要がある。ループリックの観点からは、ノートが直接的に役立つのは topic development であり、次いで delivery である。ポイントの論理的展開がノートに示されていれば、的確な topic development ができる。そして、ノートに「なにを話すか」がある程度整理されていれば、より自然な delivery ができる。だが、ノートに気を取られすぎると、delivery や language use に支障が出る。

日本では、論理的に話す訓練が学校教育で十分に行われていないことが多く、日本人受験者は特に **topic development** での論理的な展開に苦勞すると思われる。TOEFL では、複雑な論理が求められているわけではないが、英語での論理展開には習熟を要する。理由や具体例が反射的に出てくる必要がある。しかし、適切なノート テイキングができれば、論理展開をより確実に行える可能性がある。

また、60 秒以内で過不足なく情報を伝える必要がある。話す速度にも影響されるため、60 秒でなにをどこまで伝えられるかは、個人差がある。正確な時間管理を行うには、タイマーで時間を計りながらスピーキング練習を重ねる必要がある。

5 結論と今後の課題

ノート テイキングは、英語による発信、スピーキングを補助できる重要な技能である。筆者は、スピーキングの練習と考察を始めたときは、ノート テイキングの重要性のみに注視していた。だが、やがて練習を進めるにしたがって、ノート テイキングの基礎となるリテンション技能と、リテンション技能を鍛えるリプロダクションの重要性に気づかされた。ノート テイキングも重要であることに変わりはないが、学習手法の順番としてはリスニング、シャドウイング、リプロダクション、そして最後の段階としてノート テイキングを位置付けるのが適切と考えられる。理由は、シャドウイングの基礎技能としてリスニングがあり、またリプロダクションはシャドウイングよりも難易度が高いからである。そして、効果的なノート テイキングは、リテンション技能に基づく。これらの手法を併用して訓練することを否定するものではない。ただ、受験者の能力に応じた適切な学習手法の選択を誤ると、ノート テイキングはむしろ成績の低下につながる可能性がある。TOEFL でのノート テイキングは、時間制限内にマルチタスクで行う複雑な作業であり、一定の効果を得るには、繰り返し練習して習熟する必要がある。スピーキング スコアが低く、特にリスニングが不完全な場合にはノート テイキングよりもリスニングに集中すべき

である。もちろんノート テイキングそのものの訓練が不十分な場合も、スコアを下げる可能性がある。だが、スピーキングのスコアが二十数点程度であれば、ノート テイキングに習熟することにより、さらにスコアを伸ばせる可能性がある。

今後の研究課題としては、TOEFL スコアを伸ばすにはどのスコア範囲でどの学習手法が効果的かの裏付けと、ショート リプロダクションの体系的な訓練方法の研究が有用であろう。

6 付属資料

以下は、"TOEFL Test Prep Planner"に掲載された、統合問題のリーディング部分のパスセージ、リスニング課題として流される音声のスクリプト、問題文である。

リーディング部分のパスセージ

Flow

In psychology, the feeling of complete and energized focus in an activity is called flow. People who enter a state of flow lose their sense of time and have a feeling of great satisfaction. They become completely involved in an activity for its own sake rather than for what may result from the activity, such as money or prestige. Contrary to expectation, flow usually happens not during relaxing moments of leisure and entertainment, but when we are actively involved in a difficult enterprise, in a task that stretches our mental or physical abilities.

リスニング部分用音声のスクリプト

(Male professor) I think this will help you get a picture of what your textbook is describing. I had a friend who taught in the physics department, Professor Jones, he retired last year. . . . Anyway, I remember . . . this was a few years ago . . . I remember passing by a classroom early one morning just as he was leaving, and he looked terrible: his clothes were all rumpled, and he looked like he hadn't slept all night. And I asked

if he was OK. I was surprised when he said that he never felt better, that he was totally happy. He had spent the entire night in the classroom working on a mathematics puzzle.

He didn't stop to eat dinner; he didn't stop to sleep . . . or even rest. He was that involved in solving the puzzle. And it didn't even have anything to do with his teaching or research; he had just come across this puzzle accidentally, I think in a mathematics journal, and it just really

interested him, so he worked furiously all night and covered the blackboards in the classroom with equations and numbers and never realized that time was passing by.

問題文

Question: Explain flow and how the example used by the professor illustrates the concept.

文献

-
- ^[1] ETS. (2015). January 2014–December 2014 Test Data Test and Score Data. Retrieved March 15, 2016, from https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf
- ^[2] ETS. (2012). TOEFL Test Prep Planner. Retrieved March 15, 2016, from http://www.ets.org/s/toefl/pdf/toefl_student_test_prep_planner.pdf
- ^[3] ETS. (n.d.). Speaking Rubric. Retrieved March 15, 2016, from http://www.ets.org/Media/Tests/TOEFL/pdf/Speaking_Rubrics.pdf
- ^[4] 葛山隆一. “Speaking 24 以上の獲得が難しい理由と現実的な Speaking 目標スコア その1.” .Web TOEFL 葛山の TOEFL® TEST ブログ. 2014-11-3. <http://www.etestprep.com/blog/?p=10552>, (参照 2016-3-15).
- ^[5] Zareva, A. (2005). What is new in the new TOEFL-iBT 2006 test format? *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 2(2), 45-57.
- ^[6] Carrell, P. L. (2007). Notetaking strategies and their relationship to performance on listening comprehension and communicative assessment tasks. *ETS Research Report Series*, 2007(1), i-60.
- ^[7] Hayati, A. M., & Jalilifar, A. (2009). The impact of note-taking strategies on listening comprehension of EFL learners. *English Language Teaching*, 2(1), 101.
- ^[8] Liu, O. L. (2014). Investigating the Relationship Between Test Preparation and TOEFL iBT® Performance. *ETS Research Report Series*, 2014(2), 1-13.
- ^[9] Hale, G. A., & Courtney, R. (1991). Note taking and listening comprehension on the test of English as a foreign language. *ETS Research Report Series*, 1991(1), i-26.
- ^[10] Miller, J. (2012). Why am I stuck at 23-24 on TOEFL speaking? - English Success Academy. Retrieved March 15, 2016, from <http://englishsuccessacademy.com/why-am-i-stuck-at-23-24-on-toefl-speaking/>
- ^[11] Miller, G. A. (1956). The magical number seven, plus or minus two: some limits on our capacity for processing information. *Psychological review*, 63(2), 81.